卒業生に聞く14

未来をつくる子どもに関わる教職という仕事

長崎市立山里小学校校長 山﨑直人

「本当に自分が教員になれるのか」悩んだ大学時に出会った学び

昨年発刊された一冊の本が、話題になりました。『教員人生十か条～厳しい教育現場を生き抜く50の知恵』。若手教員十カ条から始まり、中堅どころ、教頭、校長と立場の違う教員向けの十カ条がテンポ良くまとめられた快作で、「教職以外の仕事に携わる人にも役立つ」という声も。執筆したのは山﨑直人さんです。

「教員生活三十五年と私も年を取り（笑）、これまでの経験をまとめてみようと本の出版に挑戦しました。すべて実体験で、失敗も含めて記しています。ステージが変われば見える世界も変わります。カメラのレンズが広角になるような、あるいはドローンのように俯瞰的になるような、視点場の変化を伝えることで、悩んでいる人のヒントになればうれしいですね」。

山﨑先生は、長崎大学教育学部の卒業生でもあります。教育学部では時折、教育実習を経て自分は教員には向いていないかも……と逡巡する学生もいるようです。

「はい、まさに私も大学時代は同じ悩みを抱えていました。夢や憧れで漠然と入ったものの、本当に自分が教員になれるのかと。じゃあ他に何になれるかと言われれば、自分の中には何もない。その時に、世羅博昭教授に出会い、国語科教育学のゼミに入りました。これが素晴らしい学びでしたね。それまでは教育実習に行っても、『教えてやろう』という気持ちでいっぱいでした。しかし、実は子どもの現実から教わることに価値があることに気づかされました。未熟な自分は子どもから学びながら一歩ずつ進めばいいんだと割り切れたというか、自分の中でストンとふに落ちたような気がします。そこからですね。本気で教員になろうと目指し始めました。今となって思いますが、大学で学ぶというのはそういうことなのかもしれません。さきほどの学生の悩みでいえば、大学で教員になろうという人は、きっとそこそこ勉強ができ、学校を肯定的に見られる人。だから、うまくいかないとギャップを感じて自信をなくすのでしょう。しかし、『分からない』を知る人は、同じように分からない悩みを持つ子どもの気持ちに寄り添うことができます。しかもそれが解決して『分かった！』を実感すれば、きっと同じ喜びを子どもたちに経験させることができるでしょう」。

ちなみにその後、世羅先生とはご縁があり、教員十年目に入った鳴門教育大学大学院で、再び先生に師事することができたのだそうです。

自分の言葉で伝えてみよう 創造的平和教育の実践

山﨑さんは、平和公園に程近い長崎市立山里小学校の校長先生です。今後の平和教育が大きな課題といわれる中で、最前線はどのような状況なのでしょう。

「長崎市としても、これまでの継承と発信に『創造』を加え、被爆者との対話を取り入れるなど創意工夫を重ねています。山里小学校の敷地内には『長崎の鐘』を執筆した永井隆博士が建立した『あの子らの碑』や資料館、防空壕があり、修学旅行生などが全国から何万人もやって来ます。学校としても、平和教育の、特に『創造』の部分で使命を感じています。原爆の日の行事だけでなく、十月に行う平和ウォークが特徴的でしょう。これは平和学習の集大成として、六年生がガイドとなって平和公園や原爆中心地などを案内するというもの。丸暗記でしゃべるのではなく、思いや感想を自分の言葉で語りながら伝えていきます。平和に限らず、伝える力が養われますよ」。

コロナ禍で、学校運営にも変化がありましたか。

「朝礼や行事ごとの講話は、校長室から行うZoom集会が増えました。これは良い面もあって、集まったり戻ったりという時間のロスがない。また、パソコンを通して目の前で話すことで、よく見え、伝えやすいのです。そこで、大事なことを書いた大きなカードや模型を使って話してみました。これ、この前子どもたちに受けたんですけどね（と、背の高い箱の模型と人形が登場）。ゴールだけ見るとても高くて登れない。でも……（と箱の角度を変えると階段が。人形を動かしながら）階段を使って一歩ずつ上がっていけば大丈夫。途中で嫌になっちゃったら（もう一体の人形が登場）、友達がいるよ。友達と一緒に頑張ってみよう！」。

楽しい！ これは伝わりますね！

「視覚情報＋聴覚情報ですね。コロナ後も活用できそうです。教員は伝えるのが仕事。でも往々にして『教えたつもり、伝わったつもり』になって、十のうち三か四しか伝わらないこともある。それでは教えたことにはなりません。伝えたいことが十あれば、伝え方を工夫する。『伝わったことが伝えたこと』と考えています。こういう工夫は私の楽しみでもあります。人形はね、今は成人したうちの子が使っていたおもちゃを家から持ってきました」。

最後に、若い世代に向けて教職の勧めを一言お願いします。

「今、教職は労働時間が長くてきつい仕事というイメージがありますが、現場では少しずつ改善されています。私がこの仕事にやりがいを感じるのは、子どもたちが未来をつくる担い手だから。教職は、未来の社会をつくる人に関わることができる、尊くて崇高な仕事なのです。良い未来をつくるために、ぜひ、若い人たちが教育の世界に入って来てほしいと心から願っています」。

昨年上梓した『教員人生十か条～厳しい教育現場を生き抜く50の知恵』（渓水社）。

やまさき なおと
長崎市出身。1987年、長崎大学教育学部卒業。同年、小学校教員として採用され、長崎市立新興善小学校を皮切りにいくつかの長崎県内の小学校へ赴任。1996年、鳴門教育大学大学院へ2年間内地留学。その後教育委員会などを経て、2017年より現職。専門は小学校教育・国語科教育。